



令和5年度羽田中学校だより

天 空 の 橋

令和6年1月12日 1月号

目指す生徒像・・・

Hear

Never Give Up

Do Our Best

大田区立羽田中学校

能登半島地震をうけて

あけましておめでとうございます。「おめでとう」といいましたが、皆さんご存じのように今年は元旦から大きな災害・事故が起こっています。「能登半島地震」と「羽田空港での衝突事故」です。能登半島地震は最大震度7・マグニチュード7.6の大きな地震でした。報道によれば、今日（1/9）の時点で、死者168名・不明者300人以上、未だ、全貌がつかめない大災害です。亡くなられた方のご冥福を祈りたいと思います。羽田空港の事故については、近くに住んでいる皆さんにとってある意味、切迫感のある事故だったと思います。いずれも大きな出来事ですが、この1週間ずっと考えさせられたのが、能登半島地震のことでした。始業式の挨拶にはふさわしくはないかもしれませんが、よい機会なので「考えさせられた内容」を話したいと思います。なぜ、考えさせられたかということ、能登半島地震のような大きな災害が、他人事とは思えなかったためです。

知っている人も多いと思いますが、私たち東京に住む人間が大きな影響を受ける地震が二つ来ると予想されています。一つは「首都圏直下型地震」、もう一つは「南海トラフ地震」です。首都圏直下型地震は、ちょうど今回の能登半島地震が首都圏・東京で起こるイメージの地震です。この1週間、たくさんの家が崩壊した状態や、大規模な火事、沿岸部の津波などを見ていると思います。それがここ東京で起きる。こう考えると非常に大変な災害だとわかります。想定されている死者数が6000人くらい、今回の二十倍にもなる大災害です。

南海トラフ地震は、13年前の東日本大震災が、東海地方から九州にかけて起きるイメージの地震です。想定では、今回一カ所で起きた震度7の揺れが、10県以上で起きます。津波が各地で10m以上、ところによっては30mの波が襲います。今回の10倍の高さです。30mは羽田中の校舎より高い津波です。想定されている死者数は最大で30万人以上。これは、東日本大震災の十数倍となります。

首都圏直下型地震も、南海トラフ地震もこれから30年間に70～80%の確率でくるとされています。周期を考えてみても、皆さんが30～40歳くらいの時期に来ることが一番可能性が高い状態です。こういった大きな地震が来たときに、まず大事なことは「命を守る」こと。これについて、避難訓練のときにまた話したいと思います。

私が正月に考えたのは、そのあとのことです。今回、1週間たっても、まだ避難所での生活が続いています。首都圏直下型地震が来たら、同じように避難生活になることが想像できます。避難所では、どうやって生活するのでしょうか。公助と呼ばれる行政、国とか都とか区などの助けがあります。でも、能登半島での様子を観ればわかるように公序は限定的で、ただ避難していればすべて誰かがやってくれるというような状態ではありません。つまり、共助という「みんなで助け合って生活すること」が絶対に必要な状態になります。そして、その中心となるのは、30～40歳で大人になっている皆さんです。気になるのは、さらにそのあとの社会の状態です。首都圏直下型地震は経済的被害が95兆円という想定です。これは日本の国家予算と同じ程度の金額。南海トラフ地震の経済的被害が220兆円、これは日本の国家予算の2倍程度の金額です。そんな大きな被害を受けたとき、日本社会は、壊滅的なダメージを受けることになります。つまり、これから来る大きな災害のあとは、日本という国を、「立て直す」「やり直す」ということが必要になります。それができなければ、日本は先進国の地位から外れてしまうかもしれません。今のような、豊かな暮らしができる国ではなくなってしまう可能性が高いのです。大きなダメージを受けた日本という国をうまく「立て直す」「やり直す」のは、やはり30～40歳で大人になっている皆さんということになります。

日本は、今から80年前に、「やり直す」「立て直す」ということを行っています。第二次世界大戦で焼け野原になった状態からの復活、それ以上の興隆です。それをやったのは、みんなのひいおじいちゃん、おばあちゃんの世代の人たちです。これは、ものすごいことだなあと感じます。それと同じような「やり直し」「立て直し」を、大人になった皆さんはできるだろうか？ ずっと、それを考えていました。今、「できるだろうか」と言いましたが、「皆さんに責任がある」と言いたいのではありません。皆さんを育てる教員という立場として「育てることができるだろうか」という大人の立場の責任を感じているのです。もちろん、「できるだろうか」などと無責任な言い方はよくありません。私たち教員、ひいては大人は「できるように皆さんを育てなければいけない」のです。先生・大人たちが「これから来る国の危機的な状況を踏まえ、社会をつくりあげることができるように若い人たちを育てなければいけない」、そんなことを考えていました。今、私が思っているのは、皆さんを「仲間として育てたい」ということ、「大人として育

てたい」ということです。まず「自分たちの社会を自分たちで運営する・つくる仲間にならなければならない」という「思い」があります。同じ日本に住む社会に属するメンバーとして、社会のために動くという仲間を育てなければならないという「思い」です。先生の方が生徒より偉くて「先生が生徒に何でも言うことをきかせる」「生徒はあまり考えずに従えばいい」というような学校では、先生と生徒が敵対します。自分たちの社会をつくっていく仲間としては育っていかないでしょう。何よりも、自分たちで工夫して社会をつくっていく能力が育ちません。「誰かがやってくれるのを待っている」「やりたいことだけを言って、それがかなえられなかったら文句を言う」ような状態は、子どもな状態です。これでは、社会をつくっていくことはできません。危機に対応できません。「現実を踏まえて、自分たちで何とかする」「工夫する」「自分から動く」、これが大人です。大人として育てるには、できるだけ大人として接する必要があります。自分たちのことを自分で決め、決めたことについての実行や、責任も考えさせる。義務教育の最終課程である中学校では、それができるようにしていかなければいけない。そんなことを考えていました。まだまだ、羽田中で「仲間として育てる」「大人として育てる」ことができていくという自信はありません。でも、これからの学校の大きな方向性だと思っています。さて、3年生はこれから受験本番となります。受験は、今書いてきた「大人になる」ためのいい経験の機会だと思っています。「誰かがやってくれるのを待っていて」も、何ともならない経験です。自分の努力の結果、その現実で、自分のことが決まっていくという経験です。いくら希望や「思い」を言っても、希望だけでは、現実が開かれませんか。現実を踏まえて、自分から努力をするという、大人になるためのいい経験です。3年生の皆さんとは、ほぼ全員と面接をしました。面接のときの様子は非常に素晴らしいものでした。自分の将来を切り拓くために、自分から努力していることがよくわかりました。本番の入試でも良い結果がでることを期待していますし、応援しています。そして、受験が終わった後、「自分の努力によって人生を切り拓く」という体験、その努力による成果を、ぜひ後輩である1・2年生に伝える3学期にしてほしいと思っています。

